

【巻頭特集】

English A

- ハーヴァード大学一年生の文章道場 -

日本学士院 院長 久保 正彰

遡ること60年以上も昔、1949年秋から翌1950年春、私が19歳のころ、ハーヴァード大学一年生の日々を通じて味わった、苦渋にみちた思い出を、記憶の断片を拾いながらお話したい。

そのころハーヴァードの新入生はみな、入学早々に『English Composition』と題する赤い表紙のパンフレット一冊を渡されて、それをよく読み、来る金曜日の4時までに任意の主題のもとに600字数（単語数）の作文をタイプして提出するように、という最初の宿題を言い渡された。私が何を題として選んだか、それはどうしても思い出す事ができない。というよりも、題名が微塵に吹き飛ばされてしまうような評点を頂いたのである。それは『E』であった。ハーヴァードの成績評価には、そのころA, B, C, D, E, Fという六種あったが、最低の『F』を貰った学生は、理由をとわず、即日退学ということが、学則によって定められていた。それまで私は、アンドーヴァーにある有名なブレック・スクールで学び、英語でも並の成績を貰っていたので、ショックは大きかった。

即日私は劣等生として学生部に呼び出され、評点『E』をつけて下さったバートレット先生と対面する破目となった。先生は英

文学で博士号をとられたばかりの若い学者で、大学に残って研究を続けるかたわら、一年生の英作指導という仕事に加わっておられた。English Aという英作指導には、一人の先生には10名余りの新入生が割り振られて、対面指導に近い形で、授業が行われた。そのために、ポスドクの若い先生たちが、総員40～50名動員され、一年間それぞれのグループ(セクション)を受け持っていたのである。

バートレット先生は、余白が赤い訂正マークで埋め尽くされた私の600字の作文と私の顔を見比べながら、実はついさっき学籍簿を見る迄、君が日本からの留学生だということを知らなかったのだ、と言われ、そしてなぜ『E』という評価をつけたのか、まるでご自分の間違いを糺して行くかのように、その理由を詳しく説明され始めたのである。

第一に、君は自分が豊富な単語の数を知っていることだけを、見境無く無意味に誇示しがっている。第二に個々の言葉には、普通使われてしかるべき文脈があるわけだが、君にはこれについての知識が皆無にちかい。第三に、英語の係り結び(慣用表現 Idiom)についての理解がきわめて不十分である。第四に、…… 第五に、……、という

具合に欠点ごとに減点を重ねていくと、遂に『E』の評点に辿り着く。微にいり細を穿った先生のご指摘は1時間近く続いたように思う。黙って何ううちに、最初は当惑に身が震えたが、やがて初めて教わる英語散文の『文章』基本について少しづつ興味が沸き、最後には深い感銘とも感謝とも分ちがたい気持ちに包まれたのを覚えている。こんなに文章規範から脱落した英文しか今は書けなくても、間違いが判りそれを克服すれば、きっと良い文章を書く事ができるのだよ、という言外の励ましが、先生の懇切なご指摘から聞こえてくるように思えたからであろう。

約1,000名の新入生の全員にEnglish Aが課せられた訳ではない。私と一年間同室で暮らした英国からの留学生レインは、はやくも高校時代から新聞記事を執筆していた文章家であったので、あらためてEnglish Aを必修とは言われなかった。また隣室のエヤーズも、私と同じアンドーヴァの卒業生であったが、15歳で大学入試に合格した大秀才であり、文章力抜群と評されて、English Aは免除されていた。このような極く少数の例外的能力者を除く一年生のほぼ全員には、希望する専攻分野の如何を問わず一年間、English Aは必修科目として課せられた。1週3時間の授業出席に加えて、毎週金曜日4時限までにタイプ印書600字の課題指定の作文提出が、厳しく課せられたのである。ハーヴァードに入学したばかりの一年生はおよそ皆、自分は秀才であると思込んでいる。けれども、実は英語散文の文章規範について多少なりとも心得のあるものは、実に数少ない。English Aが必修の基礎科目とされていた

理由はそれだけではない。その後3年間に教わる専門科目は、自然科学を含む殆ど全てその成績評価は、主として散文記述によるレポートを対象にして行われていた。人並みの表現能力に達した人間として認められ卒業するためには、多くの事象についての正確な、客観的記述の基本を体得していることが絶対に必要とされていたからである。

English Aの授業は、第一に、文章の構成要素である単語の吟味と選択の基本から始まった。教材は、学生たち自身が前の金曜日に提出した作文原稿そのものである。同義語が複数ある英単語の場合、それらは大別して、アングロ・サクソン(Anglo-Saxon)系とそれ以外のものに分かれるが、後者の多くはギリシャ・ラテン語に由来する。前者の基本的特色は、単音節したがってまた単アクセントであるのに対して、後者は一語でも多音節で、したがって一語でもアクセントを持たない音節を複数含んでいるものが多い。例えば、前者のgoに対して、後者のproceedやadvance、また前者のtryに対して、後者のattemptなどがあげられる。English Aでは、事象の記述においては“文脈の許すかぎり”、前者すなわちアングロ・サクソン系の基礎単語の使用が強く求められた。同じ主旨の文章でも、無駄無く引き締まった響きと姿になる。大学進学以前にキケロのラテン語を習得してきた学生にとっては、これは直ぐに分かる。また英語を母国語とし、耳で単音節語とそうでない単語の響きを生得している者にとっては、このEnglish Aの基本要請を理解することはさして難しいものではなかったろう。それであっても、この要請

がバートレット先生の口から 15 人前後のクラスに伝えられるやいなや、学生たちからは一斉に異論反論が沸き起こる。proceed の使用はやめるとしても、procedure の使用はやめられない、対応するアングロ・サクソン系の単語はないのだから、とか、また attempt の代わりに try を使うことには異議はないが、trial and error のような表現の場合、error はラテン語であるけれども、これの代わりに英単語 mistake を用いているのは、耳障りではないのか、等々である。

これらの一々の質問に対して先生は、実に丁寧に、問題のラテン単語やイディオムが何時どのような経過によって、アングロ・サクソン語圏と触れ合い、現代英語のなかに市民権を得ることとなったのかを説明されて、English A の要請のなかで、“文脈の許す限り”という但し書きがついているのは、その歴史的由来を指しているのである、なお詳しくはオクスフォード英語辞典(OED)を読みなさい、と答えられる。このような遣り取りが先生とアメリカ人学生たちとの間に何度か繰り返されるのを聞いているうちに、私のような漢字と仮名のなかで育ってきた留学生の心にも、自ずと一つ一つの英単語の意味と歴史的由来についての、新しい意識が生まれてくる。同義語の系統を意識的に二つに弁別するということは、同時に一つの単語が、アングロ・サクソン系であれギリシャ・ラテン系であれ、それが英語として使われるようになった生活史を見届ける道につながり、またそれを進めば、やがて自分がその語を使う時、その語をより好ましい形と響きで生かせるということに思い至るのである。この道は、文章

はできる限り無駄を省き、簡潔にせよ、という English A の第二の要請にも連なる。私は、このような作文規範の理屈はよく理解できたが、実際にはその規範を具体的に表しているお手本を何処に求めればいいのか分からず、先生にお尋ねしたところ、New Yorker や Harper's Magazine の最新号の幾編かの論説を挙げられて、読んでみるよというご指示を頂いたことを有難く覚えている。

単語の吟味に続いて、English A のクラスでは様々の課題が取り上げられたが、そのなかで今もなお、深い印象を留めているものを一例挙げてみたい。それは、“任意に、A, B 二つの事柄(事象)選び、記述せよ”、という題であった。A, B 二つのものを選び、比較して記述することは、言わば、対象を客観的に記述するために必要な第一歩であろう。しかし、昨日と今日、天と地、宇宙と原子、のように、時間的、空間的、質量的に対比関係が明らかな二物もあるが、これとは異なり、同じ時空の枠を分かち合いながら、複雑な質の交換関係を織りなす生物世界の、『生』と『死』のような二つの事象もある。それに直面する人間に襲いかかる喜びや悲哀とか、『希望』と『絶望』などの感情もまた、A, B 二つの事象として選ぶ事ができる。組み合わせを変えて、『喜悦』と『希望』、『絶望と悲哀』をペアにして論ずる事もできる。さらに、人間が己の知的限界を記すために創り出した、『偶然』と『必然』、という二つの概念を選んで記述することもありうる。English A の学生たちは、茫然たる事象の海に投げ込まれて、さあ、任意に A, B 二つの浮き輪を見つけて、岸まで泳いでみる、と言われていたような気分

に陥る。

このような森羅万象のなかから、A、B二つの事象の組み合わせを選ぶことは、任意の行為でしかありえない。つまり、Aを選ぶ行為によって初めて、書き手の立場あるいは視点が定まり、さらにBを選ぶことによって、二つの事象についての、記述の平面と方向性が設定され、文体が定まる。つまり、最初の文字を記する前に、600字の作文内容の構想が十分に検討されていないとてはならない。ずっと後になって気づいたことであるが、文章作成よりも先に記述者自身の思念の形を明確に意識させることこそが、English A教育の主眼目であったように思う。多くの場合、人はさして明確な構想を意識することのないままに、ペンを取り、作文する。それでも、ほどほどの目的を達し得るかもしれない。しかし作文の途中で、自分は一体何を表現しようとしているのか、という疑いに遮られ、ペンが止まってしまうことも、稀ではない。このような首尾の一貫性を欠く作文は、慎むべきである、という教えを、具体的な課題の形で示しているのが、“任意に、二つの事象を選び、論述せよ”というものではないだろうか。書き始めるまえに、描くべきA、B二つの対象が明確に把握されており、二つの事象の本質と相互の関係が脳裏に捕捉されていないとては、この課題には満足に答えられない。このことを、いやが上にもはっ

きりと、学生たちに意識させるのである。

この場合にも、パートレット先生は、毎回の授業において学生たちの提出作品を教材にして、丁寧に解説され、学生たちの異論反論に対して、徹底的に答える労を惜しまれなかった。余談ながら、極く最近、ふとしたことから、W. Whewell (1794-1866)の『帰納的諸科学の歴史』(1837)に触れる機会があり、そこに二つの事象についての客観的記述の重要性を説く一節があるのでみて、62年もの昔、English Aのパートレット先生の声を再び耳にするような思いに駆られた。そして、English Aは単に文章学入門であったのみならず、大学の門前で、いたずらに言葉を弄ぶ小僧たちにむかって、学問入門の第一歩を説くものであったことが、記憶の底から甦る思いがした。

私がEnglish Aから受けた、当初の評点『E』の苦しみは冒頭で述べたとおり、一時的なものであった。私の通年成績はBプラスであった。しかしEnglish Aから受けた教えと恩恵は、感謝の思いとともにその後今日にいたるまで、限りなく深く広く、自分のなかで生き、続いている。私は、教養教育の一環として、日本の諸大学においても、『日本語 A』という散文原論と実践道場が広められることを、ひそかに願っている。情報技術万能の世界が若者たちを虜にしているのを目の当たりにすればこそ、80歳の思いである。

【久保正彰先生 ご略歴】

1930年 広島生まれ
1953年 アメリカ・ハーバード大学卒業
1957年 東京大大学院人文科学研究科修了
1965年 成蹊大文学部助教授
1967年 東京大文学部教授
1991年 同名誉教授
1992年 東北芸術工科大学長などを歴任
1992年 日本学士院会員に選任、2007年10月より日本学士院長を務める。また、2000年6月より1年間、第7代日本西洋古典学会委員長就任
2004年 瑞宝重光章受章。現在、諸国学士院協賛の下に進められているラテン語の大辞典の作成に参加する。

【久保正彰先生 主な著書】

『ギリシア・ラテン文学研究』、岩波書店、1992.
『オデュッセイア 伝説と叙事詩』、岩波書店、1983.
『ギリシア悲劇とその時代 アイスキュロスについて』、岩波書店、1992.
『西洋古典学 叙事詩から演劇詩へ』、日本放送出版協会、1990.

